

シャーマン・アレクシーの ニューヨークをめぐる小編

大 島 由 起 子*

序

本論では北米先住民の現代作家シャーマン・アレクシー (Sherman Alexie 1966 - 年) の、ニューヨークと関係する 4 編の小品について論じる。なお、毎回ニューヨーク市と記すのは煩雑なので、本稿ではニューヨークと表記することとする。

アレクシーは、おそらくこれまでの先住民作家の中でも、最もメディアへの露出度が高く、敵陣 (白人世界) でも人気を博している (Moore 298)。ただし、ビジネスや娯楽産業においては両人種の新たなる戦争が始まっているとアレクシーが考えている点を失念してはならない (Grassian 94)。

おそらくはこうした理由とも絡むのであろうが、全般的にはニューヨークとはおよそ縁遠い先住民作家たちの中であって、いくつかの作品においてのみとはいえ、アレクシーがニューヨークそのもの、あるいはニューヨークと関連する作品を描いたことは、驚くに値しない。¹ ニューヨークに関する作品を検討することは、人種観にとどまらず、アレクシーの国家観をも知る手がかりとなるであろう。

* 福岡大学人文学部教授

シャーマン・アレクシーの故郷は、アメリカ合衆国北西部のワシントン州の東部、コロンビア川中流であり、あたりの部族同様に鮭を大切にす文化圏である。アレクシーはスポケーン族とクール・ダレン族の血を引く。彼はスポケーン族の保留地のある千人ほどの町ウェルピニットで生まれ育った。なお、この保留地にはカジノがあり、ウラン鉱山ゆえに環境汚染が進み、部族の中には癌患で命を落とすものも増えている。

アレクシーは、生まれつき水頭症であったために苛められ、苛められないようにするためにはユーモアが大切だと悟ったのだという。かくして、彼の文学の一大特徴にユーモアがある。

アレクシーは、保留地内の部族の学校に8年通ったが、一大決心をして町の白人ばかりの学校に通った。この学校では、バスケットボール部のキャプテンやクラス委員をするなどして、優秀な成績で卒業している。スポケーン市のゴンザガ大学に進学するも、今度は適応できずアルコール依存症になり、2年中退している。彼の部族には珍しく保留地から離れたにもかかわらず、彼の家族を含め保留地に蔓延しているアルコール中毒で挫折したわけである。同ワシントン州のシアトル市に移ってワシントン州立大学に入り、今度はそこで素晴らしい師に出会えて詩作に没頭するようになる。アメリカン・スタディーズで学士号を取得して卒業した。短期間他の職につくこともあったが、比較的すぐに人気作家となり、現在に至っている。映画の脚本や製作にも関わる。現在もシアトル在住である。

半自伝的なヤングアダルト小説 *Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* (2009年) で、アレクシーは「私の故郷、ウェルピニットとリアダンに捧ぐ」と献辞に書き、保留地のある生まれ育ったウェルピニットと、14歳のときから通学したリアダンの、双方が自分にとっての故郷だという認識を示している。この献辞からも、彼が先住民と白人と、双方の世界の住人だということが窺える。

本論では、軽くアレクシーの二作目の長編小説 *Indian Killer*（2008年）におけるニューヨークと関連する箇所を覗いたあと、ニューヨークと関係する4編の小品について論じる。すなわち、*The First Indian on the Moon*（1993年）所収の3作品——詩“On The Amtrak From Boston To New York City”、散文“Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert”と散文“The Native American Broadcasting System”、そして *The Summer of Black Widows*（1996年）所収の詩“Things for an Indian) to Do in New York (City)”——である。*Indian Killer* 以外はいずれも、ほぼ等閑視されてきた作品である。なお、本稿の *Indian Killer* 以外のアレクシー作品の訳は、私訳である。

1. *Indian Killer*——スカイウォーカーの活躍

白人が手に入れた当初にも、発展期にも、摩天楼建設期にも、存外、ニューヨークは先住民と関連する。

アレクシーの代表作のひとつである、彼の長編小説第1作 *Reservation Blues* には、ニューヨーク市を舞台とした章がひとつある（第8章）。この作品で、アレクシーは単なるひとつの背景という以上の役割をニューヨークに与えている。その理由については、ここでは立ち入らず、稿を改めて検討する予定である。

本稿でニューヨークとの関連で触れておきたい作品は、アレクシーの *Indian Killer* である。これはニューヨークではなく西海岸ワシントン州のシアトル市を舞台とした作品であるが、主人公の運命と絡む形でニューヨークとも関係がある。

主人公ジョン・スミスは、生まれ落ちてすぐに白人家庭で養子にされて白人

のように育てられたので、先住民の文化を皆目、身につけていない。だが彼には先住民に対する憧憬は抑えがたく、常にそのことで葛藤している。先住民のことを知りたくても自分がどの部族かもわからず、先住民の知り合いのひとりもいないのである。

そのジョンが、シアトルでは最後の摩天楼の建設現場で働いている。その仕事に就いた理由は、ニューヨークのワールド・トレード・センターで働くモホーク族が高所での仕事でも恐れ知らずであることを知って、憧れたからだった。ジョンには、模範となる先住民が回りにいない。ジョンは、長髪で背が高く屈強な身体をしているので、外見は映画にでも出てきそうな先住民戦士のようだが、それは見かけだけのことで、精神的には脆弱で、その弱さを本人が一番知っている。そうした彼がスカイウォーカーの強さに憧れるのは至極当然ともいえる。そのように強さを憧憬したが、結局は、そのビルの天辺から飛び降り自殺をして果てる展開になるのだから、皮肉極まりない。

Indian Killer のこうした物語展開と関連するニューヨーク史を押さえておきたい。摩天楼建設ラッシュの時代となると、高層ビルの建設現場では、先住民スカイウォーカー（特にモホーク族）が^{とび}鳶職で活躍する。²

アレクシーの *Reservation Blues* (2005年) では、ワールド・トレード・センターが、次のように主人公たちヴィクターとジュニアが話しているときに、軽い話題として出てくる。主人公たちの先住民が結成したバンドが、フラットヘッド族の保留地で初ライブをしたときのことである。ジュニアは両親が酒飲みなので飲まないと宣言していたのに、悪友で早くから飲み始めていたヴィクターはビール瓶を持たせる。するとジュニアは飲み乾し、そのビール瓶を「ワールド・トレード・センターから落とされて株式仲買人の頭上に落ちたかぼちゃみたいに、大きな音を立てて割った」(57) この台詞が飛び出すのは、西海岸のワシントン州でのことなのに、なぜニューヨークのワールド・トレード・センターやら株式仲買人のイメージを伴う描写にしなくてはならないの

か。ここにはウォール街への破壊願望の一端が感じられる。

スカイウォーカーの活躍にもかかわらず、できてしまえばそのビジネス街は世界の金融の中心であり、先住民からはほど遠い世界に変わり果てる。

2. “On The Amtrak From Boston To New York City” ——アメリカ史への密かなる反発

本章では、詩 “On The Amtrak From Boston To New York City” を検討するが、その前に、少し大極的に見ておきたい。この作品を収めた詩集 *The First Indian on the Moon* は5セクションから成り、本稿で扱う3作品はいずれも “The Native American Broadcasting System” というセクションにある。このセクションの最初に配されているのが本稿第2章で扱う “On The Amtrak From Boston To New York City” である。本稿では扱わない短い詩 “The Game Between the Jews and the Indians is Tied Going into the Bottom of the Ninth Inning” を挟んで、本稿第3章で扱う散文 “Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert” と、本稿第4章で扱う散文 “The Native American Broadcasting System” が続き、あと6作品がこのセクションにはある。

こうした配置から推して、本章を含む本稿第2～4章で扱う3作品にある程度の連続性を読むことも許されるであろう。とくに “On The Amtrak From Boston To New York City” と “Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert” には一人称の「私」が登場して語るし、両作品にはスポケーンへの言及があるのみか、共通した主題が顕著であるから、ふたりを同一人物とみなすことも可能かもしれない。

ここからは、“On The Amtrak From Boston To New York City”を検討していく。タイトル「ボストンからニューヨークまでアムトラックに乗って」のとおり、北米先住民である一人称の歌い手「私」は、全米を結ぶ鉄道交通網アムトラックに乗って、ボストンからニューヨークに向かっている。これはアメリカ史に考えを巡らせるのに適したルートといえるだろう。ボストンはバンカーヒルの戦いをはじめアメリカ独立戦争と関係が深い。周辺には、アメリカ初の大学であるハーヴァード大学など、有名大学がある。このように、ボストンが知的で洗練された町であることはよく知られている。また、ボストンのあるマサチューセッツ州といえば、マサチューセッツ湾植民地時代に始まり、この詩作品に出てくるソローと関連深いコンコードもある。本作品で「私」が乗っているのは、そうした歴史の町ボストンと、現代、文化面でも金融の点でもアメリカのエネルギーを代表するニューヨークを結ぶ幹線である。よって、これは歴史を辿り直すようなルートともいえる。

短詩であり、かつ複雑な詩なので、全訳をつけておく。

通路向こうから、その白人婦人が私に言う「ね、
歴史を見て、あの家、
丘の上に 200 年以上、あそこに建ってるんですよ。」
と、私の方の窓を指さす
彼女が教え込まれてきたことへと。私は学んだ
アメリカ史について、少しだけ学んだ
東部で過ごした 2、3 日で、思ったより多くのことを
私たち皆が知っているべき部族のストーリーよりは、うんと少なくとも
それが作った物は、15,000 年も古い
丘の上に博物館として建っている
あの家の礎よりも。「ウォールデン湖」

と、列車のその婦人が私に訊く、「ウォールデン湖は見ました？」

私は、彼女を苛みたくはない

西部にある私のささやかな保留地には

ウォールデン湖は5つ

少なくともスポケーン周りには、もう 100 もあるのだ、などと告げて。

私が自分の故郷だというふりをしている都市のことさ。「ね、」

と私は彼女に言ってやったってよかったのだ。「俺にはよ、ウォールデンなんて、どーだっていいんだぜ。あの湖のあたりじゃインディアンが生きているストーリーだったって知っているからさ

ウォールデンの祖父母が生まれる前にあの池あたりの

4代前のご先祖様が生まれる前によ。

それを救おうってドン・ヘンリーの野郎が御託を並べているのを聞かされるのにも、うんざりなのさ、

だって、そんなことは、いまさらだぜ。もしドン・ヘンリー野郎の兄弟姉妹や親どもが、そもそもここに来てさえいなけりゃ

それなら、守らなきゃならないものなんて何〜にもないだろうってわけさ」ってよ。

でも、私はその婦人には一言も言わなかった、ウォールデン湖について 彼女はかくも微笑み嬉しそうにしていたから

彼女にオレンジジュースを買ってきてあげようかと思った

食堂車から。私は年配者を敬う

あらゆる人種の。私が実際にしたことといえば

味気ないサンドウィッチを食べ、ダイエット・ペプシを飲み

その婦人が何か指摘するたびに、頷いただけ

彼女の国の歴史についての、また他の、ささやかな事について

一方で私は、インディアンなら誰でもしただろうが

この戦争が始まってからずっと、計画した
次に何をして何を言おうかと
敵の誰かさんは、私のことを味方だと思った。 (79)

以上が作品である。この詩では、通路越に話しかけて来る年配の白人女性は、おせっかいとはいえ気のいい愛国的な人物と見える。彼女は、「歴史の全て (all the history)」を見るようにと先住民である「私」に語りかけて、アメリカの輝かしい歴史を教えようとして、次々と例を示すのである。

この女性はまず、200年そこに建っているという丘の上の家 (“that house/ on the hill”) を指す。概念的には、「丘の上の家」とは、ピューリタンの指導者であり後にマサチューセッツ州の総督になったジョン・ウインスロップが、北米に向かう大西洋上のアラベラ号の船上で行った、“A Model of Christian Charity” という演説を意識しているはずである。ウインスロップは、これから自分たちが新世界で作る町ボストンのことを「マタイ伝 5章14節」にある「丘の上の町」(City upon a Hill) にしようとした。そのように、皆で結束して慈善と愛情に満ちた共同体を作ろうと訴え、世界中の人が注視しているので、自分たちが全世界に範を示すべきであると、気概を示したのである。

そうした考え方を、アレクシーの詩のこの女性は、一般アメリカ人がそうであるように、家庭や学校で教え込まれて育ったのであろう。実際にこうした女性に出会うことで、「私」は今回の東部での旅で、白人の歴史観について随分学んだという。「丘の上の町」という修辞が表わす選民意識は、アメリカの領土拡大と先住民の掃討を〈明白な天命〉という独善的なイデオロギーにつながっていくものである。(西谷 132-34)

この女性は200年と言うことで、アメリカ合衆国には長い歴史があると誇っているわけだが、何十世紀も前から先祖が北米に住んでいる先住民である「私」は、彼女の言葉に何ら感銘を受けない。それどころか、「丘の上に博物館とし

て建っている / あの家礎よりも」の詩行から推定できるように、アメリカ白人が何かにつけて博物館に収めたがる志向を揶揄しているのとってよい。アメリカ合衆国という新しい国にある古いものを誇る博物館に、その「丘の上の家」が展示物として建っているという認識である。つまり、先住民である「私」は、築2世紀ほどの邸に感動するどころか、先住民には15,000年以上昔の建築物 (architecture) があつたことに思いを馳せる。「私」は自分が先住民史を把握していると豪語こそしていないが、先住民史が、そうした200年の白人の歴史よりも桁違いに古いと考える。「15,000年以上昔の」物といえば、「私」にとっては、「先住民の伝統、聖地、部族のお話のこと」(Grassian 46) である。「西洋の植民地にされる以前の南北アメリカで、聖なる歴史的なサイトが作られ守られていたのだ。ところが、この女性にしてもアメリカ人の大多数にしても、そのことを意識しないか気にもかけない」(Grassian 46)。architecture という言葉からは、たとえば、アメリカ合衆国の南西部にあるアナサジやら、中西部にあるハコ遺跡を、容易に想起できるはずである。いずれも、太古の遺跡で、今となつては謎の先住民部族が高度文化を持っていたことの痕跡として残っているだけで、謎だらけである。

この女性は「私」に、ウォールデン湖を見たかと訊いてくる。ボストンと同じくマサチューセッツ州にあるコンコードの近くの湖のことである。

この女性にとっては、ウォールデンといえば、ヘンリー・デイヴィッド・ソローが湖畔に家をひとり建てて2年2ヶ月を過ごして、その体験を基に思索を加えて *Walden; or, Life in the Woods* (1854年) に作品化したウォールデン、その湖を描いてない。*Walden* は米文学において燦然と輝く記念碑的な作品となり、アメリカにおける環境文学の始原ともなり、環境文学研究隆盛の昨今では再度の注目を浴びている。この女性をはじめとする一般アメリカ人にとって、ウォールデンといえば、あのウォールデンなのであって、それはもう唯一無二の存在である。

その唯一無二の絶対性を、「私」は揶揄してかかる。「私」は、自分のささやかな保留地だけででもウォールデンという呼称の湖が5つあり、スポケーン市の周りにはさらに100もあることを思う。100というのは大げさな概数だろうが、何のための大げさな物言いかといえば、アメリカ白人が宝だとみなしているソローのウォーデンの絶対性など、先住民から見れば何ほどでもないと唱えたいのである。³白人到来前の北米は、ソローのウォールデン湖並みの美しい神秘的な湖だらけだったのである。

このあたりから急に「私」の口吻が荒くなる。「俺にはよ、ウォールデンなんて、どーだっっていいんだぜ。俺はあの湖のあたりじゃインディアンが生きているストーリーだったって知っているからさ」という詩行も荒い口調で、皮肉たっぷりである。この詩行は、自然の中で生きたことを誇るソローへの当てつけであろう。2年ほどウォールデンの自然の中で自給自足に近い生活を営んだだけで偉そうにするんじゃないとでも言いたげである。どこのウォールデンであれ、それをいうならば自然界のどこであれ、先住民は一生自然界で生きているがゆえに、各々の先住民が、生きたストーリーなのだ。しばらくウォールデンの自然に浸って、生涯、頻繁に自然界に出かけて行って散策をし続けたくらいで特権的だとみなされているソローよりも、自然界で自給自足して生きてきた先住民こそが本物なのだ、とでも主張したげである。

「私」は、この女性の先祖である白人たちさえ来なければ、そもそもウォールデン湖は保護を要さないのだからと考える。この作品のウォールデンへの言及について、批評家ダニエル・グラッシアンは、夥しい先住民の聖地が保護されてこなかったことを指していると解釈しているが、そのとおりであろう。

(Grassian 46)

しかし「私」は、そのような環境保護運動など「いまさら (redundant)」だと感じざるをえない。「私」の考えでは、あたりから先住民が駆逐された北東部ニューイングランドで、先住民を愛し、今更、先住民のことを大切に思う

くらいなら、そもそも白人が北米に到来しなければよかった、それだけのことなのである。よって、「もしドン・ヘンリー野郎の兄弟姉妹や親どもがそもそもここに来てさえいなけりゃ」、「それなら、守らなきゃならないものなんて何へんにもないだろう」ということになる。訳するにあたって、Don-fucking-Henleyを「ドン・ヘンリーの野郎」としたが、これはスラングのfuckingを含む下卑た言葉遣いで、作品のこのあたりから語る声の変調は顕著である。深読みをするのならば、ウォールデンとの関連箇所のでるので、Henleyというのは、つまりヘンリー・デイヴィッド・ソローのHenryをも想起させると解釈しても良いであろう。加えて、Donということなので、スペインやポルトガルによる南北アメリカ支配の始まりへの遡及までも視野に入れているとも解せる。

なお、ドン・ヘンリーは、実在人物である。元イーグルスのメンバーとあって音楽活動で有名であるが、この作品との関連では活動家としての側面が重要である。1990年に彼はWalden Woods ProjectというNPOを立ち上げ、ウォールデンの森を商業的な開発から保護すべく、ウォールデン湖畔を環境保護運動の聖地として特別保護区にした。

このように見てくると、ウォールデンにアレクシーは、実に様々な皮肉を籠めている。

「私」にはこの女性と話しこむ時間はありそうであるが、「私」は腹を割ってコミュニケーションをしようとはしない。代わりに、そうしない説明責任を果たそうとするかのように、「私」は、自分が先住民としていかなる人種の年配者をも敬うように教えられ、その教えを実践しているだけだと、読者に伝える。この「私」の態度に、底知れない諦観を読み取ることは可能であろう。

この詩は、10連から成る——4行から成る連が9つあり、最後に1行のみで成り立つ連がひとつ付いている。内容面に着目して、便宜的にここでは4部に分けて構成を示したい。第1～3連を第1部、第4～6連を第2部、第7～9

連を第3部、そして最後連を第4部とすると、概ね、内容に関して本詩は次のような構成だといえる。すなわち、第1部と第3部は列車での出来事についてであり、第2部と第4部は「私」の本音についてであるというように、交互に「私」の本音を挟み込む形になっている。「概ね」としたのは、第2部が通常の4行からなる連では終わらず、続く第3部の1行目にずれ込んでいるからである。この第3部の1行目、「『それなら守らなきゃならないものなんて何～んにもないだろうってわけさ』ってさ」は、作品の最終行「敵の誰かさんは、私のことを味方だと思った。」と並んで、決め台詞というべき行になっている。

以上見てきたように、「私」は、白人女性の言葉に、何かにつけて皮肉な考えを巡らせる。しかもただの捻くれた皮肉には留まらない。次のように、白人との「戦争」という言葉を飛び出させるのだから、穏やかではない。作品最後から2つ目の連全体を再度引いておく。

彼女の国の歴史についての、また他の、ささやかな事について
一方で私は、インディアンなら誰でもしただろうが
この戦争が始まってからずっと、計画した
次に何をして何を言おうかと (79)

「私」は、白人到来以来、今日に至るまで、先住民と白人との「戦争」がいまだに続いていると考えている。むしろ、現代の戦争は、武器を使って血を流す戦争ではなく、あくまでも言葉の戦いのことである。次に自分が何を言おうかと計算しながら、慎重に進めていく類の、知性の戦いなのである。

慎重であるがゆえに、「私」が彼女に自分が敵だと悟らせることはない。かくも微笑み嬉しそうにしているこの女性のために、「私」は食堂車でジュースを買ってきてあげたいと思うほどである。

アレクシーはこのように、白人に近いところにおいて、好まれながらも、敵

意に満ちた皮肉な視点を忘れない。それが、この“On The Amtrak From Boston To New York City”には端的に表れているといえよう。既述のように、アレクシーといえばユーモアがまず一大特長として浮かぶが、本章で検討してきたような冷ややかさ、そして戦意が、彼の文学世界の核には確実にある。読者としては、そのことを失念してはならない。しかも、この詩は、そうした好戦的な視座というものは「インディアンなら誰でも」持つものなのだという。ただ、付加しておくなくてはならないが、「私」は先住民の代表格のようだと自己認識をしていない。「私」が自分の故郷だというふりをしているスポケーン」という詩行からは、「私」の自分の部族スポケーンの保留地との関係は複雑であることは明らかである。ここには、アレクシー自身の故郷との複雑な関係が映されているとみなしてよい

一見穏やかなようで、不気味な作品であると結論できるだろう。

3. “Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert” ——雑多で自由な町、痛快な一幕

本章で検討したいのは、1 ページ強の散文作品“Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert”である。この作品にも、作家アレクシー自身だとみなしてよい「私」が登場する。「私」は、自分がニューヨークを熟知していると宣言して、その理由を断片的に連ねていく。

このような作品である。おそらく、ボブという名の友人が運転している自動車の車窓から、「私」はニューヨークの街角を興味深く眺めている。この好奇心に満ちた眺め方から、「私」がニューヨークに来たばかりだということがわかる。

まず「私」は、車窓から見えるバスケットボールをする人々の肌が黒いことを不思議がる。

そして「私」は、ニューヨークの町を歩いて、次から次に不思議な気分には捕らわれていく。雑踏を感じながらこう述べる——「私は一生、先住民だったが、今や〔ここニューヨークでは、〕私はチカーノであり、プエルトリコ系であり、中国系であり、日系であり、イラク系であり、非正統派のユダヤ系であった」(81)と。ニューヨークで、「私」は、初めてインディアンというアイデンティティから解き放たれたと感じる。

街中のリンカーンセンター近くの薬局の中を歩いているときのこと、「私」はさらに奇妙な気分襲われる。理由は、白人の店員が、「私」のことを疑わしげに監視したりしないからである。「私」は故郷ではいつも、先住民であるがゆえに万引きでもしかねないと見られてきたので、監視されない状態に違和感を覚えたのだ。店員が「私」を監視しない理由は、ここニューヨークが多様な肌の人間にあふれかえっている街だから、「私」をいちいちマークする必要がないからである。むろん裏を返せば、それだけ「私」は故郷では、先住民であるというだけで不愉快な思いをしていたというわけである。

しかし、ニューヨークで初めてインディアンというアイデンティティから解き放たれたと感じたからといっても、「私」は自由を享受するような心境にはなれない。それどころか、自由になった違和感に戸惑う——「私はスポケーンの町を恋しくなるくらいだった。自分の生まれた町、そして常に自分のダークな目と皮膚と髪を思いださせる、あの町のことを」(81)。このような倒錯した心理というものは、「私」が白人の偏見に満ちた先住民観を内面化している証左である。

「私」は、このように奇妙な気分にとらわれていたものだから、すんでのところで友人が救ってくれなければ、角を曲がってきたタクシーに撥ねられそうになる。そのとき「私」には、その運転手が、ターバンをしたカスターに見える。これについては後述したい。

そして、直後に、唐突に、ワンセンテンス・ワンパラグラフが飛び出す

——「それでも、すべてのものの中に美がある（“Still, there is beauty in everything.”）」(81)。これは殺し文句のように作用する。この一文こそが、アレクシーの信条であり、彼の幅の広さを表わし、彼が先住民以外の読者にも人気を博す一大要因といってもよい。⁴

何もかも、つまり、この直前に書かれたタクシーに撥ねられかけた恐怖体験も、また、この直後に描かれる奇妙な犬のエピソードも、「私」には美しいと映るというわけである。

この美への言及を念頭に、作品冒頭にあったバスケットボールの箇所に戻りたい。そのバスケットボードにはゴールのリング（リム）だけがあり、ネットもチェーンも付いておらず、つまりは貧困をイメージさせる。しかし美があらゆるところに宿ると宣言する限りは、アレクシーはこのバスケットボードにも美を見ているのである。それがどのような類の美であるか推測してみたい。そこにはコート of 全面があるのではなく、ボードひとつだけがある。敵も味方も、同じひとつのゴールをめぐる点の取り合いの攻防を想像しながらプレーをする。物質的に豊かでなくても、プレーの仕方には豊かな想像力、そして生命の躍動が感知されるのであろう。「私」は、それを美しいと眺めているのである。

既述のように、「私」は車窓から見ただけではなく、街を歩く。「通りでも、地下鉄でも、私を過ぎていく、私を通していく（through me）、誰もが、私より肌が黒い」。(81)「私を通して」という表現からは、「私」がただ雑踏を歩いているのではなく、いわば無となり、人々を身体全体で受け止めて、全身全霊でニューヨークを感じていることがわかる。

作品は、目に飛び込んでくるさらなる景の描写に戻る。赤信号で「私」を乗せた車が停まっている間に、ある出来事が起きる。これが作品の3分の1の分量を占める。これは解釈困難な光景というべきもので、読者には一幕物の演劇のようにも読める。

スーツ姿の男が舗道の^{スタンド}屋台でピザを一切れ買っている。むろんニューヨークの街角のごくありふれた光景である。そのスーツ姿の男は、自分の持っていたブリーフケースをぼんと落として、買ったばかりのピザを荷台に置く。荷台をテーブル代わりにして食べようというのだ。彼が、ブリーフケースを拾い上げようと屈んだとたんのこと、「野良犬 (a stray dog)」が一匹走ってくる。この犬は、跳び上がって、食べ物の荷台の上のピザをさらって走り去る。一瞬の出来事である。

男はピザをくわえて逃げ去る犬を罵る。だが、話にはもう一捻りある。犬が、突然止まると向きを変えて、今度は男の方に走って来るのだ。男はもう罵ってはいない。罵るような余裕などなく、彼は自分が噛まれて狂犬病になったり負傷したりする様子を想像して怯える。すると、怯えるこの男の脇で、その犬は、空中に跳び、今度は荷台からパーパープレート^{パーパープレート}をさらって別方向に突っ走る。

その光景を見ていた「私」は、「何てマナーの犬なんだ！」と思う。ここでは、「何てマナーの犬なんだ！」を、犬のマナーの悪さを批判する言葉ととるべきではない。「私」が直後に、「よし、よし、よし (Good dog, good dog, good dog.)」と続けるからである。しかもこれが作品の最終文となっている。

解説が困難なエピソードである。軽く解釈することも、重たく解釈することもできそうである。

軽く取るのであれば、その犬は、今度は空になった（載っていたピザをさらうことで自分が空にした）パーパープレートを咥えて去るのだから、戯れているともとれる。この犬が、ここまでピザを取ったり、パーパープレートをまるでフリスビーよろしく取ったりするのが上手だということは、この犬は頻繁にこういうことをして楽しんでいるとすら想像できる。

しかし、軽くとるだけですまないのがアレクシーの文学世界の常でもある。であるとすれば、この作品は話を、たとえば野良犬が羽振りのよい人間から物

をくすねて空腹を満たすといった飢えという現実を映す話とは別次元にずらして考えてみなくてはならないだろう。この犬がピザをさらうだけなら、食欲のなせる業である。野良犬であればなおさら、空腹を満たすための行為である。しかし犬が、怒鳴っている男の所に即、走り戻って、今度はプレートを取って先ほどとは別方向へ逃げるときには、食欲とは無縁である。盗んだピザを落ちて置いて食べる方がよほど良いだろうから。戻って来るときの犬は、食欲を超えた何らかの理由で動いているととるべきである。

この犬がただの迷い犬だとは思えない。スーツ姿の男が狂犬病を怖れるのだから、野良犬ととってよいであろう。この男性が想像するとおりに、野良犬であれば狂犬病に罹っている恐れがあるし、罵ったのだから男性が犬に噛まれて血を流す羽目にならないとも限らない。つまり突然、事態は逆転して、この男性は怯えるのである。それはニューヨークの只中で、人間など野生においては弱者にすぎないと悟る瞬間でもある。そして、おそらくその逆転をアレクシーは喝采しているのである。

わけてもこの犬のエピソードが強烈な印象を残すのは、この、どこからともなく走ってきた犬について、「もしかすると、そいつはスポケーン保留地から来たのかもしれない」（81）という一文が付されている不思議にもよる。スポケーン保留地は大陸の反対側にある。また、とくに世界の中心のようなニューヨークと比べれば、「何でもないような場所（nowhere）」であることが際立つ。よって、このスポケーン保留地への唐突な言及には、よほどの象徴的な意味合いがあるはずである。こう読み替えることも許されるかもしれない——「もしかすると、そいつはスポケーン保留地から来て、マンハッタンで働くホワイトカラーに復讐をしたのかもしれない」と。

答えを求めるために、この作品における、もうひとつの唐突な言及を補助線としてみたい。先述の、「私」がタクシーに撥ねられそうになる場面である。そのときその運転手が「私」にはカスターに見えるとは、どういうことである

うか。自分の命を奪いかねない男は誰でも彼でも「私」にはカスターに見えるというわけである。この運転手はターバンをしているからにはシーク教徒なのだろう。白人である可能性は低い。運転手の名前を知らないにもかかわらず「私」は、この人物がカスターだと断言する。「カスター」が象徴するような白人だとみなすのである。

ファーストネームが出ていなくても、先住民にとって、またアレクシーにとって、カスターとは、歴史上のジョージ・アームストロング・カスター中佐を措いてない。このカスターは、もっとも精鋭部隊であった第7騎兵を率い、大平原の覇者であったスー族（現ダコタ族）と味方の部族と戦い、結果、スー族に騎兵隊を全滅させられて、自らも落命した。この大平原の覇者であったスー族とのリトル・ビッグホーンの戦いは、インディアン戦争史上あまりに有名な戦闘である。カスターということでは、一体、敵とは誰で、どこまで、誰を、敵だと認識すべきなのかという問いを立てなくてはならない。詳述の余裕はないが、アレクシーは *Reservation Blues* でカスターをアームストロング社長という形で効果的に使ったことがある。⁵

ボブという友人がニューヨーカーかどうかは作品には書かれていないが、彼の車で「私」がニューヨークを回っていることなどに鑑みれば、ボブがニューヨーカーである可能性が高い。いずれにせよボブは、「私」のように、あちこちに敵を見出さないで、それゆえにボブはサヴァイヴァルに長けているのだかつての「私」には思っていた。ただ、それは彼が雑多な人種・民族の街で暮らしているニューヨーカーであるからだ、ニューヨーク体験で、「私」にはわかるのである。

見てきたように、作品にはニューヨークの雑多さも描かれている。列挙すれば、バスケットボールに興じる、おそらくはアフリカ系。薬局の白人店員。そしてターバンというかぎりはイスラム教徒のタクシー運転手。そして、作品では人種は不明とはいえ社会階層は上なのであろう白人をイメージさせるスーツ

姿の男性。そして、先住民であろう友人ボブ、といった具合である。

アレクシーの *Reservation Blues* でも、ニューヨークは、雑多な人種、民族の街として描かれている。ニューヨークで、主人公たちトマスとチェスが真夜中にオールナイト・レストランに入ると、ふたりを見てウイトレスたちは、アメリカにまだ先住民が実在しているのだと驚き、ふたりのことをプエルトリコ人か何かだと思っていたと言う。

都会で暮らす先住民は、その多くが混血先住民であるが、現在、先住民全体の7割を超えている。⁶ 彼らは都会では先住民だと分からないようにして暮らしていることが多い。その方が、差別を免れえて、就職や結婚をはじめ様々な点で楽だからである。こういった現状ゆえに、先住民が保留地から都会に出ても、自国にいながら、まるで逃亡者のようにして先住民だとは覺られないように暮らしていることも多いのである。⁷

4. “The Native American Broadcasting System” ——AIM 的事件

これは、ニュース風に15の断片を告げるコラージュである。その第7セクションはわずか3行からなる一文で、次のような架空のニュースを伝えている——「13人の重武装したネイティブ・アメリカンがリバティー島に上陸して襲撃をし、自由の女神を転倒させた。」(84) ブラックジョークと解釈できそうである。

大西洋を渡って来た白人移民の多くが、なけなしの金を渡航費に当てて、自由の女神のメッセージめがけてニューヨークから上陸した。ニューヨークや周辺に定住する者たちもいたが、大多数は西へ向かった。定住する土地を得るために、先住民から土地を収奪したり先住民を殺したりした。

自由の女神像を転倒させるなどというのは、むろん架空の事件だが、いかに AIM がしでかしそうなことである。その事件が、AIM のアルカトラス島占

拠事件を彷彿とさせるからである。

少々脇道に逸れることになるが、歴史を紐解き、AIMのアルカトラス島占拠について見ておく。20世紀後半の対抗文化の時代にはアメリカ合衆国では、黒人の公民権運動を契機に、さまざまなマイノリティーの権利獲得運動が行われたことはよく知られている。北米先住民も政治的に活発になり、若者を中心にAmerican Indian Movementを結成した。1969年11月に、AIMの活動家(「戦士」)たちはサンフランシスコ湾に浮かぶ小島アルカトラス島に上陸して、島を占拠した。サンフランシスコ州立大学とカリフォルニア大学バークレー校の様々な部族から成る先住民系の学生14名であった。政治の季節とあって参加者は膨れて、一時は白人など他人種を含む1,000人もになった。

この占拠事件では、「先住民全部族連合」の76名が「領土宣言」を行った。宣言の理由にはスー族と関係するものもあった。すなわち、合衆国政府が所有する土地が不要になった場合には先住民にその土地の権利を充てることを約束した1868年にスー族との間に結ばれたララミー条約を根拠として、「領土宣言」を行ったのである。スー族とのことは歴史的には重要ではあるが、本稿の文脈でさらに重要なのは、「領土宣言」のいまひとつの理由が、オランダ人が先住民からマンハッタン島を手に入れたやり口に対する仕返しでもあったことである。

オランダ人が先住民からマンハッタン島を手に入れたやり口は、良く知られている。こうした経緯であった。ニューヨークと先住民との関係の発端は、マンハッタンの語源であるマナハッタ族である。アメリカがイギリスから独立する2世紀半ほど前のこと、オランダ人が1626年に60ギルダー(現在の約1,000ドル)相当のビーズのような光物を渡して、マンハッタン島全部を手に入れた。このマンハッタン島入手は、第3代大統領トマス・ジェファソン時代のフランスからのルイジアナ購入と並ぶ、アメリカ合衆国が得をした「大いなる買い物」であった。ただし、先住民には所有物としての土地概念が皆無であった

ために、先住民は、ただ白人に貸したつもりだったという説が有力である。

サンフランシスコで 20 世紀に起きたアルカトラス島占拠に話を戻す。事件は、この島の占拠者が強制排除されて終わった。だがそれでも、この事件が、事件を起こした若者たちのマンハッタン島への言及について、ユーモアの精神という先住民の伝統を保った者達であるという好意的な見方もある。⁸ AIM は 1 年 7 ヶ月にわたって占拠を続け、全インディアンに団結を訴えた結果、全米の注目を浴び、白人からもかなりの支持を得た。AIM は十分に当初の目的を果たしたといえる。なお、この島の占拠事件の後も AIM は運動を続けた。アルカトラス島占拠事件は一連の事件の発端であった。すなわち、1972 年の「破られた条約の旅」、それから同年の首都ワシントンにおけるインディアン管理局選挙事件、翌 1973 年のウーンデッド・ニー占拠事件である。

本章では、この作品 “The Native American Broadcasting System” の第 7 セクションを検討して、これが AIM による抵抗の歴史を踏まえて書いたことを論じた。

5. “Things (for an Indian) to Do in New York (City)” ——インディアンの真正性

“Things (for an Indian) to Do in New York (City)” は *The Summer of Black Widows* 所収の詩作品であるので、これまで本稿で扱ってきた作品とは別の作品に収められている。

“Things (for an Indian) to Do in New York (City)” は、ニューヨークでの、インディアンとしてのアイデンティティを探る作品で、どのように生きていけばよいのかという理想像を、示している。非常にわかりやすく示している点、注目に値する。

まず、ブラウンという色について検討したい。詩の一人称の「俺」は、自分

のことを「ブラウン」だというアイデンティティを抱く。「俺が、保留地を出たときにはさ / 茶色だった、俺の世界全部が、白になったのさ / だが、ここニューヨークに來りゃ、誰もが茶色 // だが、これもアメリカさ」(127) ニューヨークでは認識の転回が起きるというのである。保留地を出たときには茶色だったが、故郷ワシントン州の都市に出てみると、そこは圧倒的に白人の社会なので「白になった」。しかし「ここニューヨークに來りゃ、誰もが茶色 / だが、これもアメリカ」ということになる。

批評家ナンシー・J・ピーターソンは、この詩はこう示唆しているという——「アレクシーにとって、部族主義で考えることは、白きアメリカの人種差別と暴力に抵抗する行為である。白きアメリカの人種差別と暴力は、(本人の生まれながらの部族アイデンティティを主張することで) ローカルに成されるかもしれないし、(より広い抵抗のネットワークに加わることで) グローバルになされるかもしれない。」(Peterson 153)

この詩には次のような詩行もあり、インディアンのも真正性とは何かという問いに答えを出している。引用には英語も付けておく。行変えに注目したい。アメリカン・インディアンとかネイティブ・アメリカンだとかが行変えで離されているので、アメリカンが付着するのを嫌がっているようにも読める。

[T]here is another Indian, I mean, another American
Indian sitting on the subway seat next to me—
really, in the seat right beside me, our legs touch
and I am convinced that she's Indian, Native
American, Aboriginal, beneath her clothes
and she's Indian in her clothes, and her clothes are Indian
because she's wearing them.

もうひとりインディアンがいる、つまり、もうひとりのアメリカン
 インディアンが地下鉄で僕の横に座ってる——
 ほんとうに、僕のすぐ隣に、僕らの脚は触れ合いながら
 僕は確信するのさ、彼女はインディアンだって、ネイティブ
 アメリカン、先住民^{アボリジナル}だって、彼女が着ている服の中では
 そして彼女は、着てる服の中でインディアンさ、彼女の服はインディアンさ
 だって彼女が着てるんだから。(129-30)

引用部の末尾からは、そしてピーターソンが述べるとおり、このインディアン女性、アメリカ人（つまり主流アメリカ人）と、インディアンとの双方のアイデンティティを持っていると推測できる。しかし、彼女は外的状況やら文脈がなんであろうと、核のところ、本質的なところでは、インディアンとして生きており、そう振舞うやり方を代表しているのだ（Peterson 155）。

本詩のメッセージは、いたってストレートである。どこにいて何を着ていても、その人物はインディアンである。つまり、保留地とはおよそ対極といえるようなニューヨークにいて地下鉄で座っていても、その魂がインディアンでさえあれば、その人物は全面的に、インディアンである。そういう認識を示している。おそらく、地下鉄の女性は伝統的なインディアンの服は着ていない。それでも、彼女が着てさえいれば、その服はインディアンの服になるというのである。一事が万事である。

このように、この作品には、悟ったような境地が示されている。アレクシーのように保留地を飛び出している、長髪ではなくって白人と同じような服装をしていても、その魂が先住民でさえあれば、それで先住民なのだという。居直りのようなものすら察知できるかもしれない。

ニューヨークに限らず、保留地とは無縁のどの都会でもこの生き方は有効であろう。この作品でニューヨークは、保留地とは対極の世界として描かれて

いる。つまりこの作品はインディアンの真正性を問うているのだ。

結論

アレクシーの国家観、文明感を探るためにニューヨークに注目をして、従来は等閑視されることが多かった作品を検討した。“On The Amtrak From Boston To New York City”、“Because I Was in New York City Once and Have Since Become an Expert”、“The Native American Broadcasting System”、そして“Things (for an Indian) to Do in New York (City)”である。

ニューヨークは存外、先住民と関連がある。アレクシーは先住民にとって都会とは何かを考えさせる作家である。

詩“On The Amtrak From Boston To New York City”、にあったように、アレクシーの歴史観、文明感というものは、およそ一般白人、あるいは一般に学校教育で教えられているものとは乖離している。彼は白人と先住民の戦争はまだ終わってはいないと考え、日々、言葉の戦士として戦っているのである。

しかしまた、アレクシーは全てのものに美が宿っていると考えるのであるから、彼はニューヨークにも美を見つけている。よって、我々読者としてはニューヨークの両義性を見ていくべきであり、アレクシーにとってニューヨークはただ否定されるべき場所ではないという結論に達するべきである。ニューヨークの雑多性は、先住民としてのアイデンティティについて思索を深める好材料を供してくれるといえよう。

注

1. アレクシーの初期作品は自伝的に保留地を設定とすることも多かったが、*The Toughest Indian in the World*以降は都会に設定する傾向がある。

2. 南修平著の『アメリカを創る男たち——ニューヨーク建設労働者の生活世界と「愛国主義」』は、「愛国主義」を副題に持ち、移民や公民権運動に強調があるからであろうか、先住民についての記述は皆無である。「ニューヨークにやって来たヨーロッパ出身の移民やその子孫である白人男性を中心とする建設労働者が、過酷な現場で働きながら組合を中心に結束し、コミュニティでもその絆を深めていく様子を詳細に描いていく。」(9) と序章にあるとおりである。このように、先住民の活躍は無視されることが多い。
3. ソローと同じ、アメリカン・ルネッサンス期の作家でも、アレクシーは、詩集 *The Summer of Black Widows* 所収の詩“Defending Walt Whitman”で、ウォルト・ホイットマンには親愛の情を示している。
4. 美が全てに宿るというのと似た、敢えて肯定的な部分を見出そうという傾向は、*Absolutely True Diary of a Part-Time Indian* にもある。保留地の悲惨さの中にも、ユーモアを忘れない点に救いを見る箇所にも出てくると考えてよいであろう。(166)
5. *Reservation Blues* では、キャバルリー [騎兵隊]・レコードという会社の社長アームストロング（ファーストネームは不明）が登場し、主人公たち先住民のバンドを破滅させるといってもよい。こうした社名や社長名の会社から先住民のバンドをデビューさせようとする自体、無神経であり、皮肉な会社名となっている。
6. 今日、北米先住民の78%が保留地の外で、72%が都会で、暮らしている。
7. 先住民ジェラルド・ヴィゼナーの批評書 *Fugitive Poses* の表題にも明らかなように、何万年も前から北米にいながら、先住の民でありながら、アメリカ合衆国の先住民の多くは、自国の都会で「逃亡者」のようにして、「逃亡者のふり」をして暮らしているのである。
8. 長くなるが、清水の文章を引用する。次の引用部の「アルカトラズ島に相似た島」とはマンハッタン島のことである。

しかし彼らは、ユーモアの精神——インディアンがつねに大切にしていたもの——の持主でもあった。次のような文章も書いた。白人の仕打ち、考え方を逆手にとったのである。そうしたユーモアがすこしでも伝わるように訳してみる。

「偉大なる白人の父上およびその同胞諸氏に告ぐ

われら先住アメリカ人は、すべてのアメリカ・インディアンの名において、発見の権利によってこのアルカトラズ島なる土地がわれらに属することを主張する。

われらは上記アルカトラズ島を、24ドルに相当するビーズと赤い布地で購入いたしたく、これも300年前に白人がアルカトラズ島に相似た島を購入せし折の前例に従ってのことなり。われらもとより、16エーカーの土地に対する24ドルなる価が、マンハッタン島の価に比して高価なることは承知せるも、300年間に地価が高騰せしことも心得ている者なり。」(清水 169-170)

文献

- Alexie, Sherman. *Absolutely True Diary of a Part-Time Indian*. Little, Brown Books for Young Readers, 2009.
- . *First Indian on the Moon*. Hanging Loose Press, 1993.
- . *Indian Killer*. Grove Press, 2008.
- . *Reservation Blues*. Grove Press, 2005.
- . *The Summer of Black Widows*. Hanging Loose Press, 1996.
- . *The Toughest Indian in the World*. Grove Press, 2000.
- Grassian, Daniel. *Understanding Sherman Alexie*, U of South Carolina, 2005.
- Moore, David L. "Sherman Alexie: irony, intimacy, and agency" [sic]. Joy Porter and Kenneth M. Roemer. Eds. *The Cambridge Companion to Native American Literature*. Cambridge UP, 2005.
- Peterson, Nancy J. "The Poetics of Tribalism in *The Summer of Black Widows*." Berglund, Jeff and Jan Roush. Eds. *Sherman Alexie: A Collection of Critical Essays*. The University of Utah Press, 2010.134-158.
- Vizenor, Gerald. *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence*. Nebraska UP, 1998.
- Weitzmen, David. *Skywalkers: Mohawk Ironworkers Build the City*. Flashpoint, 2010.

清水和久『米国先住民の歴史——インディアンと呼ばれた人びとの苦難・抵抗・希望』
明石書店、1986年。

南修平『アメリカを創る男たち——ニューヨーク建設労働者の生活世界と「愛国主義」』
名古屋大学出版会、2015年。

西谷修『アメリカ——異形の制度空間』講談社、2016年。